

宮廷から追放された魔導建築士、

未開の島で  
もふもふたちと  
のんびり開拓生活!

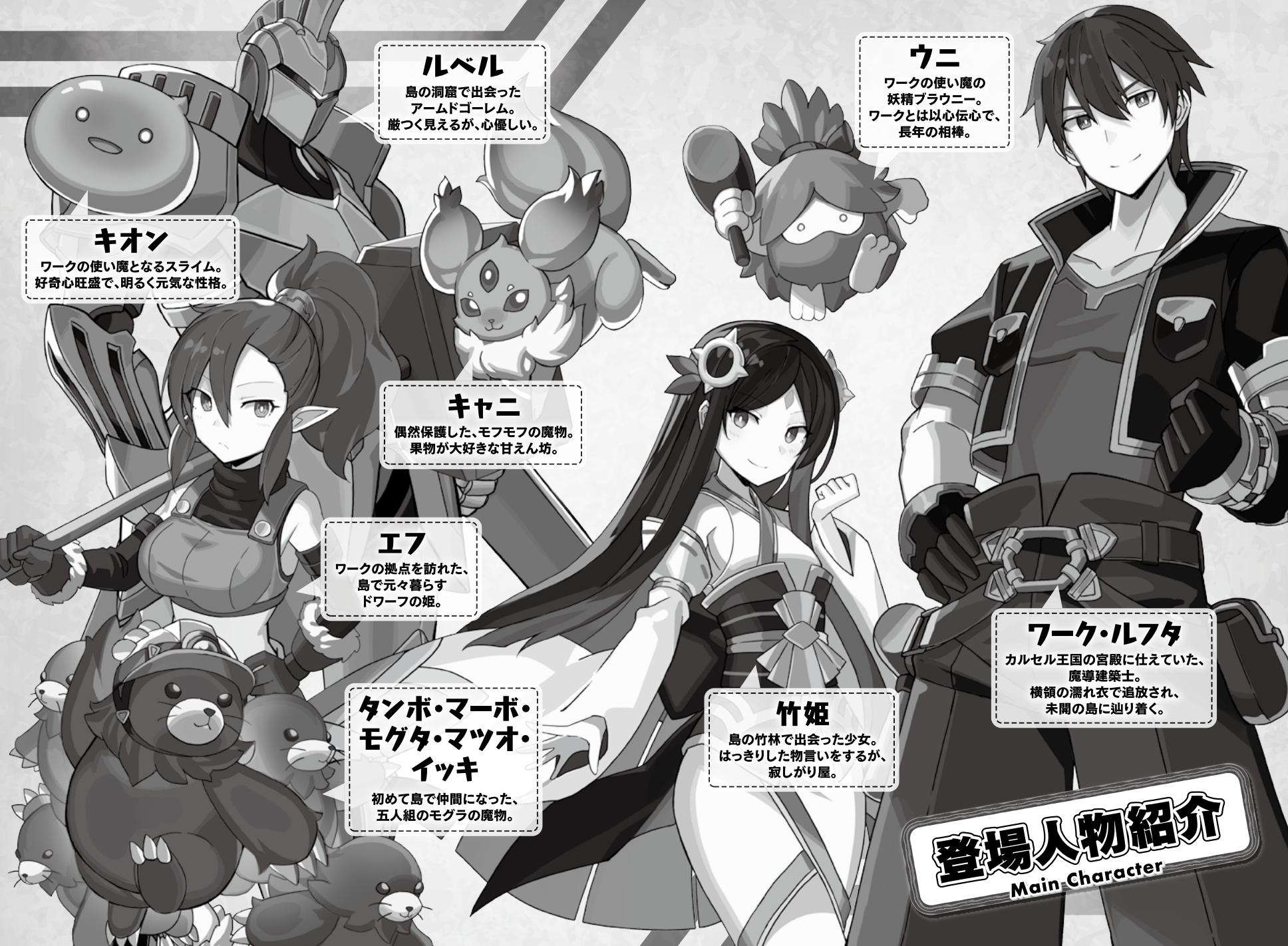
[ Author ]

空地大乃

Sorachi Daidai

[ Illustrator ]

ファルケン



**登場人物紹介**  
Main Character

## 第1章 追放された建築士

「この辺りの壁に傷みが出てるな」

俺、ワーフ・ルフタは地面に膝をつき、壁のヒビに指を当ててそう言った。

その壁を、体長二、三十センチほどの、茶色い毛に包まれた生物がまじまじと見ている。手にハンマーを握っているこの生き物は、俺のサポートをしてくれる使い魔の妖精、ブランマードのウニだ。

「ウニユ？」

ウニはこてんつと小首を傾げるが、俺の言つたことがわからないからではなく、そうだよね?と確認するような表情だ。

「ああ、ここはカリウムスライムのパテで埋めて、ミスリル塗料を塗つて補修だな」

「ウニユ！」

ウニは丸みのある手をぐつと握りしめて、やる気を見せる。

俺はこのカルセル王国の宮殿に仕える、宫廷建築士だ。

それもただの建築士ではなく、魔力の源とされるマナや魔法を使つた建築技術を使う、魔導建築

士である。

この宮廷建築士の職は元々、幼い俺を拾つて育ててくれた養父、ルーツのものだつた。その養父は二年前、俺が二十歳の時に他界し、後をこの俺が引き継いだというわけだ。

拾つてもらつた当初、見様見真似で魔導建築の技術を学んだのだが、養父は俺に素質があると

言つて、正式に弟子として育ててくれるようになつた。

養父——師匠しじゅうは厳しかつたが、同時に愛情深い人でもあつた。

そして、後継ぎとなる子がいなかつたこともあり、俺に自分の持つ技術の全てを伝授してくれた。だけど、俺はまだ未熟みじゅくだ。

本当は、師匠から学びたいことがもつとあつたんだけどな。

師匠はいつだつたか、お前に教えられることはもうとつくにないし、既に私を超えている……だなんてお世辞せいじを言ってくれたことがあつたが、今でも師匠の足元あしもとにも及ばないと、自分では思つてゐる。

そんなことを考えつ、俺はウニと一緒に宮殿を周り、壁や建物に出来てゐるひび割れや傷じゅうを修繕せいぜんして回つた。

すると——

「ふん。貴様は一体何をしてゐるのだ？」

「ドワル建設大臣」

どことなく高圧的な声で呼びかけられ振り向くと、厳しい表情でこちらを見ながら赤茶色の頸あごヒゲを手で擦さする、ゆつたりとしたローブを纏まつつた男が立つていた。

彼はドワル。カルセル王国の建設大臣だ。文字通り、この国の建設に関することは、彼が決めている。

俺は立ち上がり、軽く頭を下げてから答える。

「この壁がひび割れていたので。他にも細かい箇所に傷みが出ていたので、修繕せいぜんしていました」「ふん。その程度のことで随分と時間をかけていいのだな。そんなもの、粘土ねんどでも詰めて埋めておけばいいだろう」

「そんな。粘土ではその場のぎにしかなりませんよ」

建設大臣ともあろう者がそんなことも知らないとは思えないし、多分今は冗談だらうが、一応反論はしておく。

「塗料を塗つておけばいい。それで見栄えも良くなるではないか」

まさか本気ではないだらうけど、冗談としても笑えないでの真面目に答えておく。

「見栄えだけ整つても……しつかり修繕しないと、もつと傷んでしまいますよ」

すると途端に、ドワル大臣はムスッとした顔になり、語氣を強めた。

「黙れ、貴様の魂胆こんたんは見えてるぞ！ そうやつて仕事しているフリをして、高い金をふんだくろうとしているんだろう！」

何だつて!?

「そんな、フリだなんて……前も言いましたが、この宮殿も王国の主要な建物も、私の師匠の更に二世代前の師匠が造られたものです。老朽化<sup>ろうきゅうか</sup>が進んでいて、あちこちが傷んでいるんですよ。いい加減、全面的な改修工事が必要だから、許可が欲しいと伝えさせて頂いたはずですが」

「ああ、確かに聞いたよ。その見積もりも見せてもらつた」

「そうですか。ではどうですか?」

「どうですかではない! 何が二十五兆コージかかります、だ! ふざけるな、この詐欺師めが!」

ドワル大臣が拳を振り回し怒鳴り散らしてきた。

コージはこの国の通貨単位で、家族四人が一ヶ月暮らすのにだいたい二十五万コージ必要とされている。

それを踏まえれば、確かに二十五兆コージは莫大<sup>ばくだい</sup>な金額だが、これにはちゃんと理由があつた。「しかし、それでもかなり費用を抑えているのですよ? ほほ材料費だけみたいなところもありますし……」

「その材料費が高すぎるというのだ! 何だ、このマンクリートやら何やらわけのわからない材料は!」

ドワル大臣は唾<sup>つば</sup>を飛ばしながら更に叫ぶ。

何だ、と言われば、マンクリートは従来のコンクリートに、マナを混ぜ込んだ建築資材だ。

魔導建築においては基本中の基本であり、それでいてとても重要な建築材料の一つでもある。このマンクリートを使ってこそ、建築術式を十全に建築物に組み込むことが出来るのだ。

魔導建築土の扱う建築物は規模が大きい。

この宮殿くらいの規模の建築物に術式を刻むのは、普通の魔術師や、より強い力を持つ存在である魔導師や賢者といった方でも不可能だ。

しかしそれを可能としたのが、俺が師匠から受け継いだ魔導建築の業<sup>わざ</sup>、そしてマンクリートをはじめとした素材なのである。

ただ、それらの素材はどうしても高価になつてしまふので、修繕費用がかさむのも仕方ないだろう。

かといって、修繕しないというわけにもいかない。

この国には魔導建築によつて作られた建造物が多いのだ。

宮殿や城、各種道路<sup>もぢょうろう</sup>は勿論<sup>むろん</sup>、橋や砦<sup>とりで</sup>、結界塔<sup>けつかいとう</sup>、上下水道やアリーナ、港、多目的ホール、神殿、聖堂、噴水<sup>ふんすい</sup>など、挙げれば切りがないほどだ。

だがそれらは全て、百年以上前に造られたものなので、耐久年数も限界に近い。

一切の手抜きも感じられない匠<sup>たくみ</sup>の技で作られたものだが、建築術式もそろそろ効果が切れてくる頃だ。それに、時代の流れで新たな技術が生み出された今となつては、色々手直しが必要な箇所もある。

加えて、修繕を急ぐ大きな理由の一つに、来年にはこの国で魔導大祭典が開かれる予定だというのがあった。

魔導大祭典は四年に一度開かれる魔法の祭典で、世界中から様々な要人が集まる。

賢者や魔導師といった大物もやつてくるし、魔法の実力を競う大会などの大掛かりなイベントも開かれるのだ。

開催地に選ばれることができそもそも名誉なことだが、しかしこのまま傷んだ建造物を放つておいたら当然、影響が出るだろう。

だからこそ、ここで一度思い切った全面的な改修工事が必要と判断したのだが……

「とにかく。そんなもの認められん」

「しかし、そうなると、今のように細かい修繕をし続けなければいけません。今直した分だけでも五万コードかかります。こういったのが何箇所も出でてくると、この宮殿だけでもかかる費用は毎月五千二百万コード。更に、このまま放置していくには、状況が悪化してこの三倍はかかるようになります。国全体で考えたら、今のうちに予算を組んで手を付けていた方が間違いないと思いますが」

「ウニユツ！」

俺の足元ではウニがそろそろだ、と言わんばかりに腕を振り上げていた。

「黙れ黙れ！ もう我慢ならん！ このことは陛下に報告させてもらうからな！」

ところがドワル大臣は俺の言葉を聞かず、大股歩きで立ち去ってしまった。

しかし弱つたな。魔導建築は特殊な技術が必要だから、誰でも出来るというものではない。どうしても俺がメインで動く必要が出てくる。

今も一応、他の職人に出来る作業は頼むようにしているが、正直に言つてしまえば、この国の職人の技術はそこまで高くない。

俺の助手を務められる人材もいないので、そこはウニに頼りつきになってしまっているほどだ。俺はドワル大臣の背中を見ながら、小さく呟いた。

「ままならないものだな」

「ウニユツ……」

そして俺はある日、王に直接呼ばれ、謁見室に赴いた。

俺の目の前にいる王はまだ若く、年も三十歳手前といったところだ。

先代の王は数年前、まだ師匠が生きていた頃に、六十歳を目前にして突如体調を崩し、そのまま崩御されてしまった。そのため、嫡男が即位されたのである。

そんな王が、玉座の前で片膝を突く俺を見下しながら口を開く。

「ワークよ。大臣から話を聞いたが、お主、普段から仕事をしたフリだけをしている分際で、随分

と偉そうなことを言っているようだな

「そんな、偉うことだなんて。私は……」

「言い訳をするな。貴様が作成した見積もりを私も読ませてもらつたが、とんでもない金額すぎて、冗談だとばかり思つておつたぞ。しかし、大臣によると貴様、本氣だと言うではないか」

「勿論、嘘うそは申し上げません」

あれでも俺は頑張つて費用は抑えた方だ。

だいたい、この国の現在の発展は、百年前の魔導建築の技術のおかげなのだ。

かつては田舎いなかの小国と馬鹿にされていたこの国も、魔導建築によつて道路が生まれ変わり、線路が敷かれ魔導列車が走るようになり、多くの魔導式工場によつて生産性も上がつた。

それらによつて生まれた利益は、この百年で相当なものになつてゐるはずだ。

確かに二十五兆コーディは大金だが、これまでの利益はもっと大きいし、この国の経済のこれからのことを考えれば、必要な出費だろう。

しかしそこで、ドワル大臣が俺と王に何か書類を渡してきた。

「ワーク。貴様に現実を教えてやる。これは、私が別の業者に頼んで作らせた新たな見積書だ、見てみろ……陛下もどうぞお納めください」

「うむ——むつ！ 何と、二百五十億コーディだと？ これで済むというのか？」

「はい。これで十分だと業者は言つております」

二百五十億だつて？ そんな馬鹿な。流石さすがにありえない。

俺はそう思いつつ、大臣の差し出してきた見積もりに目を通して、クラクラしてしまつた。

なぜならば、俺の出した見積もりとは全く違い、必要な工事箇所の数が圧倒的に少なく、また素材にも問題がある。

この大臣は本気で、これで何とかなると思つてゐるのか？

そんな俺の反応に気づかず、王は上機嫌になる。

「素晴らしい。そしてやはり貴様の見積もりはデータラメだつたか」

「違います。そもそもこれは内容そのものが全く異なつてゐる。こんなのはフェアではない」

通常相見積もりというものは条件を同じにして行うものだ。中身が全く別物では意味をなさない。「黙れ、何がフェアだ。内容が異なつてゐるのではない。お前の見積もりがふざけすぎているのだ」

「うむ。これは間違いないな。やはり大臣の言つた通りであつたか」

「言つた通り？ ドワル大臣は国王に何か吹き込んでいたのか？」

「私は前々から怪しんでいたのだ。貴様がいつも出してきてるのは、水増し請求なのではないかとな」

「水増しですって!?」

「ウニユ一！」

つい怒りが声に乗ってしまったが、それはウニも同じだったようだ。腕をブンブン振り回して茶色い毛が逆立っている。

「何だ、その顔は？ これを見れば明らかであろう。貴様の見積もりは金額も含めてデタラメすぎる。疑いようのない事実だ」

そんな、まさか王まで大臣のこのデタラメな見積書を信じるなんて……

俺があまりのショックに何も言えないでいると、ドワル大臣が口を開く。

「さて、お前が行つたのは水増し請求による横領わうりょうだ。当然詐欺罪となり重罪だ」

「待つてください。私は詐欺なんて！」

「黙れ！ この見積もりが全てを語つているのだ。更に言えば、貴様の普段のふざけた勤務態度も問題になつていてるんだぞ！」

ドワル大臣の言葉に王も深く頷く。

勤務態度だつて？ 全く身に覚えがないんだが……

しかし王は俺を見据える。

「本来ならば、このまま罪人として処刑してやりたいところだが……一応は私の父も魔導建築士には世話になつたしな。それを配慮して、追放处分で許してやろう」

「追放。それは本気で言つているのですか？」

「貴様！ 隆下による決定を不服というのか！」

ドワル大臣が俺の言葉に囁みついてくるが、無視して話を続ける。

「……念のための確認ですが、私を追放するということは、建設大臣の出した見積書に沿つて施工するということですか？」

「当然そうなるであろうな」

「この先、とんでもないことになりますよ？」

「何？」

王が怪訝けげんな表情で言い返してきた。

ドワル大臣も、何を言つているんだこいつは？ という目でこっちを見ている。

「何がとんでもないだ。お前の頭の方がとんでもないだろう」

「冗談で言つてはいるわけじやありません。例えば、この見積もりには材料として魔石綿まきせきめんが記載されています」

俺は大臣の見積書を手で打ち鳴らしながら指摘した。大臣は不満そうな顔をしている。

「それの何が悪い？ この魔石綿は画期的な代物しろもので、奇跡の鉱物こうぶつとまで言われている。安価で万能。

防音性、耐熱性、耐魔性とあらゆる面で優れている。むしろ使わない方がおかしいぐらいだ」

「確かに魔石が纖維質せんいしつになつたこの素材は、一度発掘されるとその周囲に大量に眠つてることが多いため価格も安く抑えられますし、今言つたように多機能で万能に思えます……一見は」

魔石というのは魔力がよく馴染なじんだ石状の物質を指す。地中に鉱床があつたり、一部の魔物の体

内から獲れたりする。魔導建築にも何かと使える便利なものだ。

「何だ。それなら何の問題もないではないか」

「それがそうではないのです。纖維化した魔石は空中に飛散しやすく、それを人間が吸引してしまえば魔力障害を引き起こし、人体に多大な影響を与えるのです」

魔力障害は体内的各種器官にも悪影響を及ぼす。肺炎を引き起こすこともあれば内臓の損傷、神経の裂傷、血液の逆流などなど、挙げればきりがない。

それに魔力障害を引き起こした魔術師は、まともに魔法を行使出来なくなる。

最悪、死に至ることもあるのだから、看過出来ない問題である。

「そんなのはデタラメだ！陛下。こんな奴の与太話を信じてはいけません。この素材を使つたことがあるという職人からも、特に問題があるとは聞いておりません」

ドワル大臣が自信満々に王に説明しているが、魔石綿の障害は静かなる呪いと呼ばれていて、すぐ影響が出るものではない。

しかし真綿で首を絞めるようにゆつくりと症状が進行していくため、気づいた時には手遅れになつてていることが多いのだ。

そんなことも知らず、ドワル大臣は言葉を続ける。

「陛下。この男は、この魔石綿を他の職人に薦められた際、駄目だ駄目だの一点張りで、取り合うことすらなかつたと言うのです。その職人は、何でこれだけ安価で便利な素材があるので、それよ

りはるかに高価なミスリルウールなんて使用するのかと、不思議がつっていました」

ミスリルウールとは、ミスリルという金属を人工的に纖維化させたものだ。

ミスリルは一般的には高価な装備品の素材として知られているが、特殊な溶魔液に漬け込むことで溶かすことが出来る。

ミスリルは魔力伝導率の調整が比較的容易に行える金属で、それを纖維化して扱いやすくしたミスリルウールは、魔導建築には欠かせない素材である。

確かに高価だが勝手に飛散することがなく、健康被害の心配はない。

マンクリートもそうだが、たとえ高価な素材でも、この国を維持するには必須だ。

しかしどうやら、このドワル大臣の見積もりによると、ミスリルは一切使わず従来のコンクリートで改築を進めていくらしい。

コンクリートは、かつてはよく使われていたが、残念ながら魔法に対しても非常に脆いという特性がある。そのため、魔導建築士の使う建築術式には耐えることが出来ないのである。

俺は、これらのことと、王と大臣に出来るだけわかりやすく説明したのだが――

「ふん。何が建築術式だ。だいたい魔導建築というのがそもそも胡散臭いのだ。私の知っている魔術師に聞いたら、コンクリートにも魔法陣を描くことが可能だと言っていたぞ！」

ドワル大臣は顔を真っ赤にしてそう怒鳴ってきた。かなり感情的になつてるな。

「そもそも魔法陣と言つてゐる時点ですれています。魔法陣は小規模な範囲に効果を及ぼすために

あるもので、こういった規模の大きな構造物には対応出来ませんよ」

「黙れ！ 私の知る高名な魔術師が出来ると言つてているのだ！ しかも貴様一人を雇い続けるよりも安価でな！」

「ドワル大臣、落ち着いて聞いてください。建築術式の効果は絶大です。本来この国は、自然災害が多く、精靈の怒りとされる巨大台風に見舞われたり、地震が起こりやすかつたりします。ですが魔導建築のおかげで、その被害がほとんど抑えられているんですよ」

先代たちが魔導建築を広める前のこの国が発展しなかったのは、多くの災害に見舞われていたからという理由が大きい。

特に巨大台風は、精靈の怒りと呼ばれるだけあって、その風はマナの濁流となっていて、従来の城壁では防ぎきれない。しかしこの王都の城壁は、建築術式のおかげで頑強になつていて、建物に免震効果を付与したりしているので、被害がかなり軽減されている。もしこれらがなかつたら、王都はナの影響を受けないのだ。

地震にしても、地層安定機という魔導建築による装置を宮殿の地下に設置したり、建物に免震効果を付与したりしているので、被害がかなり軽減されている。もしこれらがなかつたら、王都はとつくる昔に崩壊していただろう。

それらの自然災害以外にも、天災級とされる凶悪な魔物や魔獣、竜がやつてくることもあるが、魔導建築で作られた結界塔という装置や城壁のおかげで、撃退してこられた。

だが、それも限界が近づいているのだ。今しつかり対策しなければ手遅れになる。

この国東には暴食竜ぼうしょくりゅうといふ凶惡な竜りゆうだつていて。もし結界が消えてしまえば、これ幸いと飛んでくることだろう。

ちなみに、魔物まつぶつといふのは魔力を多く持つ生物のことで、魔獸まくじゆといふのはその中でも更に強力な種族のことだ。

しかし、ドワル大臣が笑い声を上げた。

「ははは、台風、地震？ これはお笑いだ。つまり貴様はこう言うのだな？ 宮廷建築士ごうていけんちくしきが……自分がいるからこそ、この国は台風にも見舞われず地震の影響も受けないのだ、と？」

「そうです」

今は俺が受け継いでいるだけで、代々伝わる魔導建築のおかげというのが正確だけだ。

しかしドワル大臣は、俺の返事が気に入らなかつたらしい。

「ふざけるな！ そんな戯言、誰が信じるものか！ —— 陛下、これで理解出来たかと思ひます。

こいつはとんだホラ吹きです。疑う余地はないかと」

「うむ。そうであるな。ワークよ、本日付で宮廷建築士を解任し、この王都から追放とする。王国

の土地を踏むことも許さん、どこぞの島へでも行くがよい。三日以内に出ていくのだ。いいな！」

「まあ、せいぜい自慢の魔導建築で船でも造つて、おとなしく国から出ていくのだな。アツハッ

ハ！」

俺の意見や忠告は一切聞き入れてもらえず、王の決定で追放となってしまった。

しかも、王国の土地を踏むことすら許さずに島へ追放つて……ちょっと酷すぎないか？  
なんて思うが、これ以上言つても無駄だと思った俺は、そのまま謁見室を後にした。

宮殿の出口へ向けて俺が廊下を歩いていると、屈強な男たちを従えた中年の男が正面からやつてきて、声を掛けってきた。

「へへ、お前か。魔導建築士なんてふざけた肩書を持つてた詐欺野郎は」

「貴方たちは？」

「俺は今日からこの国の施工関係を請け負うことになつたアバネ組だ」

なるほど。

このアバネ組という奴らがあの見積書を……それにしても、後ろにいるのは職人連中だろ？ か？ こつちをジロジロ見たり小馬鹿にしたように笑つてきたりと、態度が悪い。

「ま、ここから先は俺らがしつかり引き継いでやる。お前みたいな金食い虫の無能は、さっさとこから消えるんだな」

棟梁がにやと下卑げびた笑みを浮かべて、シッショと手を振つた。俺の足元では、ウニウニが顔を陥しくさせている。

さつきまでは王の前だつたので言葉遣いに気をつけていたが、こいつら相手に気を遣う必要もなさうなので素の俺口調に戻す。

「……一応忠告だが、あの見積書通りにやるつもりならやめておくんだな。今からでも計画を練り直した方がいい。取り返しのつかないことになるぞ？」

こんな連中に教えてやる義理もないが、国全体に関わることだからな。俺はこの国から去ることだし、最後に一応は伝えておいてやる。

「かかか、おい聞いたか？ 取り返しのつかないことになるだとよ？」

「まったく面白い冗談だ」

「取り返しのつかないのは一体どつちだつて話だ」

「てめえの脳みそが取り返しがつかねえんだろ？ が」

だが連中は聞く耳持たずといった様子で、小馬鹿にしたようにゲラゲラと笑い出す。

……大臣は本気でこんな胡散臭うさんくさい連中に頼むつもりか？

「ウニイ！ ウニイ！」

するとウニが前に出て、抗議するように声を張り上げた。ウニだけは俺が間違つていなことをわかつてくれている。

「チツ、何だこのけつたいな化け物は」

「化け物じやない。俺の大事なパートナーのウニだ」

「は、何がウニだ。棘とげのねえウニなんて怖くねえんだよ！」

すると男の一人が、肩に担いでいた大榎をウニに向けて振り下ろした。何てことをするんだ！

## 【建築術式・防壁】

俺はすぐさま建築術式を行使。床の一部が盛り上がったかと思うとウニを覆う壁となり、振り下ろされた一撃を防いだ。

「な、何だ？ グヘッ！」

続けざまに、壁が更に変形して拳が飛び出し、男が殴られ吹っ飛んだ。

この宮殿は魔導建築によつて造られており、俺はどんな術式が仕込まれているか全てを把握している。

床の変形程度、どうということはないのだ。

「床が変形しただと？」

「いざという時には、王や大臣、宮殿の使用人を守れるよう術式を構築してある」

俺があつさりと答えると、棟梁は顔を赤くする。

「ふざけるな、よくも仲間を！」

「先に手を出したのはそつちだろう」

そしてウニに怪我がないか確認する。

「大丈夫か？」

「ユニ」

良かつた、特に怪我はなさそうだ。向こうは鼻の骨ぐらい砕けたかもしれないが、先に仕掛けて

きたのだからそれぐらい当然だ。

俺は棟梁に向き直つて言い捨てる。

「いいか、あんたちはこれらを全て改修しないといけないんだ。わかつたら計画から詰め直すことだな」

「……チツ、生意気なガキだ。だいたい、術式は俺らの仕事じゃねえんだよ。今は分担作業が基本だ、専門の連中に任せると……おい、行くぞ。お前もいつまでもひつくりかえってんじやねえ」

「へ、へい！ 畜生が……」

ウニを攻撃してきた奴は鼻を押さえてこつちを睨んでいたが、棟梁の言葉におとなしく従う。しかし、分担作業か。

俺だつて、それが出来ればどれだけ良かつたか。だが、残念ながら周りの理解は得られなかつたというのが実際のところだ。

元々はこうではなかつた。

先代の王は、魔導建築士に理解があつて、腕の立つ職人も用意してくれた。

だが今の王に変わつてからは、費用が高い職人は不要だと解雇、国外追放処分とされた。今の王はとにかく、先代の大切にしていた人間などが気に入らないようである。

そのせいで、残つた職人はいい加減な仕事しかしない者ばかり。

更に、こんな連中が俺の後を引き継ぐなんてな。

しかし……こいつらがあの魔石綿を使うのか？ あれは扱う職人に最も影響を及ぼすというのに。まあ、もはや知ったことではない。一応忠告はしたんだしな。

そう思い、俺はその場から去ろうとする。

「ああそうだ。俺からも一つ忠告しておいてやるよ。外に出たらせいやい氣をつけるこつた。お前さん、随分な人気者ようだからな」

去り際にアバネ組の棟梁がそんなことを言つてきた。

人気？ 俺にはこの男の言つていることが全く理解出来なかつた。だが、それも宮殿の外に出てすぐに、何のことかわかつた。

「おい出できたぞ！」

「魔導建築なんてデータラメで、とんでもない水増し請求をして私腹を肥やしていたらしいぞ。おかげで俺たちの税金が上がつたそつだ」

「この税金泥棒！」

「石を投げてやれ！」

「さつさと国から出でていけこの屑！」

「死刑にならなかつただけありがたいと思ひなさい！」

「むしろ俺らが殺してやるよ！」

「そつだ、殺せ殺せ！」

「国家に反逆したクズは抹殺しろー！」

宮殿から一步出た途端、どんでもない罵詈雜言を浴びせられ、殺氣立つた住人たちが一斉に石を投げてきたのだ。

「ウニイ！ ウニイ！」

「まずいな。さつさと離れよう」

俺はウニを肩に乗せ、走り出す。

「あ、逃げたぞ！ 追えー！」

「五体満足でこの国から出すなー！」

まったく、何だつてんだ。全員ドワル大臣の言葉を信じてゐるんだろうか？ 俺は街中を走りながらため息をつく。

この国がこんなことになつてゐるだなんて……いや、わかつていたことか。

師匠は今際の際、『王が変わつて、この国はもうダメだ』と嘆いていた。そして、『いざとなつたらこの国を出て好きに生きる』とも言つていた。さうして、『いざとなつたきつとこうなることを、師匠は——父さんは予感してゐたのかもしぬない。

「ウニユー！」

「ああ、もうここにはいられない。すぐ出ていこう」

「いたゞ、追えー！」

「ひやつはー！ 任せろ、俺ら冒険者がその首<sup>は</sup>刎<sup>は</sup>ねてやる！」

魔術師や戦士らしい出で立ちの冒険者も、声を上げながら追ってきた。

このままじや追いつかれるが、問題ない。

あのドワル大臣との言い合い以来、こんなこともあるうかと、形状変化機構つきのとある装置を作つておいたのだ。

俺は腕に嵌<sup>は</sup>めた腕輪を撫<sup>な</sup>で、建築術式を使用する。

その途端、腕輪が俺の腕から外れ、展開し始めた。

そしてその場に現れたのは――

「な！ 魔導車だと！ 一体どこから出しやがった！」

驚く声が聞こえたが構つてられない。車にウニと乗り込みアクセルを踏んで急加速。

魔導車とは、魔導建築の技術で生まれた、四つのタイヤと鉄の車体を持ち、魔力によつて走行する機械だ。

人の移動や運搬<sup>うんぱん</sup>に革命をもたらしたと言われているが、この国ではまともに作れる職人はいない。そのため出回つてゐる数はまだまだ少なく、馬車と併存<sup>へいそん</sup>しているのが現状である。

そして俺が今回展開したのは、そういつた一般的な魔導車とは異なる、魔導作業車というものだ。装甲が厚く頑丈な作りになつていて、悪路をものともせず走れるので、どんな現場でも対応出来る利便さが特徴となつてゐる。

……そういうえばドワル大臣、この魔導車とか魔導列車とか、他国に輸出したいと言つてゐたな。まあ、作れる者やメンテナンス出来る者がいないから無理とは伝えておいたけどな。

「逃<sup>な</sup>げ<sup>え</sup>ぞ！」

「ウニユツ!?」

「ああ、魔導バイクか」

魔導作業車を追いかけてきたのは、二輪で動く魔導車の亞種、魔導バイクだつた。

ペダルでこぐ人力の自転車というのがあるが、魔導バイクはそれを自動化したものだ。

魔導車よりは簡易な建築術式で作れることが多<sup>い</sup>つて安価なので、ある程度稼げるようになつた冒險者は購入することが多い。何なら、そっち系のマニアというのも存在する。

しかし俺たちを追つてゐる連中のバイクはブォンブォンブォンブォンとうるさい。

本来魔導バイクはこんな音は出ないので、どうやらバイク好きの間では、あえて音が出るよう改造してしまふ者もいるようだ。

「撃ち殺せ！」

バイクに跨<sup>またが</sup>つた連中は、魔導弓や魔導銃で攻撃してきた。

魔導弓も魔導銃も、魔導建築の副産物として生まれた。

魔導弓は、従来の弓に魔導の力を取り入れたもの。少ない力でより強いパワーを生み出せる。

魔導銃は円錐<sup>えんすい</sup>状<sup>じょう</sup>の金属の弾――魔導弾を発射する武器だ。これは魔法が使えない者でも、組み

込む弾丸次第でその力が発揮出来るという特徴がある。

俺の操る車に矢や弾丸が当たる。爆発も起きたりしたが――

「な、無傷だと！」

「そう、無傷だった。

この魔導作業車は魔物や魔獣、竜が現れるような危険地帯でも建築作業が出来るように装甲を厚くしている上、建築術式で強化されている。この装甲はそう簡単には破れない。

「だがそつちは海だぞ！」

「逃げられないわ！」

「ウニユッ!?」

バイクの連中がそんな声を上げ、ウニが焦りを見せる。

確かに俺たちは港まで来ていて、正面には海が広がっていた。

だが大丈夫だ、と俺は助手席に座るウニの頭を撫でた。さて、とりあえず追いかけてくる連中はうざつたいから何とかしよう。

「ポチツとな」

運転席に備え付けられたボタンを押すと、魔導作業車の後ろからホースが伸び、そこから大量の油——建築でも役立つ潤滑油を撒き散らす。

「おわ、な、何だ！」

「す、滑るうううううう！」

後ろから来ていたバイク連中はスリップし、バイク同士がぶつかり合って転倒、激しく車体が損傷する。おまけに元の造りが悪いからかそのまま爆発炎上した。

災難なこつて。ま、自業自得だろうな。

そんなことを思いながら、俺は魔導作業車で港から海に向かつて大きくダイブする！  
後方から王国民の歓声が響き渡る。海に落ちて終わりだと思ったのだろう。

だが魔導作業車は空中でその形を変え、一瞬にして一隻の船になつた。

海上での工事にも使える、魔導作業船。海のマナの流れを操作することで移動出来る代物だ。

人々の驚く声が港から聞こえた。  
俺は甲板に出て、離れてゆく王都の港を眺める。

「島で野垂れ死ね！」  
「この卑怯者！」

「沈没しろ！」

「島で野垂れ死ね！」  
「この卑怯者！」

「沈没しろ！」

まつたく、ひどい言われようだ。

カルセル王国の発展に、魔導建築士は必要不可欠だった。

だけど、王も大臣も王国の人々も、それを全て否定してしまった。

この先、一体あの国はどうなるのやら……術式が切れた時、何の対策も出来ていなければタダじゃ済まないだろうに。

ま、もう流石に俺も気にしていられないな。ここからは自分のことを優先させないと。

「ここからは一人で頑張らないとな」

「ウニユ！ ウニユ～！」

「おっと、ごめんごめん。ウニと二人でだな」

「ウニユ～♪」

すり寄ってくるウニの頭を撫でながら、俺はどこへ向かおうかと考えた。

魔導作業船の中に戻り、魔導レーダーで周辺の地図を開く。

ふむ、どうやらここから北東に進んだ先に島があるようだ。

「とりあえず、まずはこの島に向かつてみるか？」

「ウニユ～」

そして俺は船を操り、まだ見ぬ島へと向かうことを決めたのだつた。



「ドワル大臣。じゅうやーつワークは船で出航したよつです」「チツ、せつかく噂を流して暴動を引き起こし、冒險者まで雇つたといつのに、市街では殺せなかつたか」

部下からの報告を受け、ドワルは悔しそうに爪を噛んだ。

「生き延びられて面倒なことになつても困るんじやなかつたでしたつけ?」

そんな彼に語りかけるのは、アバネ組の棟梁だ。彼もまた、大臣のたぐらみを知つていた。

「ま、問題ないさ。念のため海賊にも声を掛けておいたからな。逃げ場もない海で、藻屑もくぎとなつて消えるだけだ」

「へ、流石見積もりをごまかすだけある。悪知恵は働きますね」

「ふん。そのことは外では言つなよ。これぐらいの旨味がなければ、大臣などやつていられないからな。来年には魔導大祭典も開かれるが、あいつが消えてくれたおかげで色々と融通ゆうづうが利きそ

うだ」

そう言ってドワルがほくそ笑む。

王に見せた見積もりは、実は本来のアバネ組のそれよりもやや高くなつていた。その差額を、自らの懐に収めようと考えていたのだ。

なんてことはない。結局のところ、見積もりをじまかして私腹を肥やさうとしていたのは、このドワルなのである。

「くくく、どうちにしろ邪魔者は消えた。あいつが渋つっていた魔導車や魔導バイクの輸出にも、ここで手がつけられる。何が他國じやまともに動かないだ、馬鹿が! 物さえあればどうでもなるのだよ、どうとでもな!」

ドワルはワークの残した建築技術すらも全て自分のものとし、荒稼ぎするつもりだった。

しかし、ドワルは理解していない。

これらは全て、魔導建築士としての知識と技術を受け継いたワークがいたからこそ、十全に機能していたのだということを。  
それらを全て無視すればどうなるか、今のドワルは知る由もない——

## 第2章 魔導建築士、大海に出る

俺、ワークを乗せた魔導作業船は悠々と海を進んでいた。

「その船、止まりやがれー！」

突然叫び声が聞こえたので甲板かんばんに出てみると、骸骨がいこつの旗はたを掲げた船が五隻、俺たちの船に近づいてきていた。

海賊船かいぞくせんか……しかし俺の船は、連中が通常狙うような商船ではない。

商船だつたら護衛船を付けてるし、どう見ても一隻でしかないこの船を狙う理由なんてない気もするけどな。

仕方ないな。俺は船に備わった拡声器で海賊船に向けて訴える。

『あ、あー。海賊に告ぐ。この船を襲つたところで得られるものはないぞ。ただ痛い目を見るだけだからやめておきたまえ』

さて、忠告は終わった。後は船に備え付けの集音機能をオンにして、海賊の様子を探つてみる。

「馬鹿かあいつは。俺らの目的はあいつを海の藻屑もじりにすることだつてのに」

「構うことはねえ。さっさと大砲ぶつ放せよ」

「てか、あの船、帆ほがなくね？ どうやつてここまで進んできたんだ？」

「急ごしらえで作ったからだろうさ、ここまで進めたのも運が良かつただけだ。放つておいても沈みそうだが、生きながらえられても面倒だしな」

「あんな中途半端な船を沈めるだけで五百万コーラジも手に入るなんて、楽勝な仕事だな」

「ふむ……どうやらあの海賊船は略奪りゃくだつ目的じゃなくて、俺たちの命が狙いのようだ。

しかし何だつて俺の命を狙う？ ……いや、国王やある大臣のことだ、徹底的に俺を消そうとしているんだろうな。追放つてのは建前で、本当は始末したかったのかかもしれないな。

悲しい話だ……あくまで憶測おもがくだけど。

それにしても、帆がないぐらいでそこまで驚くとは。確かに連中の船やカルセル王国のほとんどが船は帆船はいせんだけさ。この船だって、同じようなものを海上作業で使つたことがあるんだが。

ちなみに、海賊船はあのタイプなら出てもせいぜい速度は十五ノット——時速三十キロ弱といったところだが、俺の魔導船ならその十倍は出る。

「撃て撃てええええええ！」

「ウニョ!?」

そんなことを考えていたら奴らが海賊船から大砲をぶつ放してきて、ウニが驚きの声を上げる。

だけど、何とも旧式な大砲だいぱうだ。

大砲に込めた鉄の砲弾を火薬で飛ばすだけだし、ちょっと強力な投石機みたいなもんだ。

砲弾が水柱を上げると、海賊どもの歓喜する声が聞こえてきた。

よしや  
こつぱ  
みじん  
命中したせうううう!

これまでの御座りな」

水柱のほとんどは俺の船の手前に着水したものだし、確かに船体にも当たつたが、避けなかつたのはその必要がなかつたからだ。

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一

い  
一  
体  
ど  
う  
な  
つ  
て

それは当然だ。  
この船にも建築術式による強化がふんだんに取り入れてある。海の魔物や海竜——海に棲む竜に

斬り下れても平気なくらいには

ウニイ!

おおむね、この二種類の反転現象が、必ずしも並んで現れる。

海城にして子庄は、百害あつて一利はない。俺は沿岸に居る二

満願なんて存在は  
百害あって一利なしだ  
俺は船室に戻ると  
ハネルを操作し船のモードを変  
えた。

「親分！あの船、何か形が変わつてませんかい？」  
「こ、虚偽威しだ！」

海賊たちの焦つた声が聞こえてくる。どうやら船の変化に気がついたようだな。

かつて異常気象で王都の港周辺の海が凍りついたことがあって、その時に対策として開発した

その刀は、毎戦ごと没立つ。

行くぞ！  
全速前進！

す、すげえスピードで突つ込んでくるぞ！

た  
大丈夫だ！  
この船の装甲は厚い！

碎氷船モードの時の魔導作業船では、「バルバス・バウ」と呼ばれる大きな球状の突起が、船首

。喫水線下に突き出る

食うえ一 牽<sup>ク</sup>フラツ――――――ノユ!

魔導作業船の突撃によって、五隻の海賊船のうち三隻が大破した。

うまく避けたようで、左右に散った二隻は残っている。しかもその片方に、この海賊の長が乗っているようだ。

「やべえぞ！ ありや化け物だ、逃げる！」

「急げ急げ！」

ふむ、どうやら逃げ出すつもりのようだが……逃がすわけがない。

再びパネルを操作し、建築作業モードに変更する。

このモードでは、海水を吸い上げる強力な魔導ポンプと、吸い上げた海水を放水する設備——魔導放水砲が備わっている。

本来、海上の建築物で火災が起きた時に対応するための装備だが、圧力を上げれば十分武器としても使えるのだ。

俺は残りの海賊船に砲身を向けて、高圧力の水を射出！

「な、何だこりや！」

「水が何でこんなに、ひいいいいい！」

「竜だ！ あれはきっと船の見た目の竜なんだああああああああ！」

海賊たちの悲鳴と共にあつという間に二隻とも沈没し、これで海賊船は全て大破した。

「ウニユ～！」

「ああ、全滅だな」

ウニが今度はぴょんぴょんっと飛び跳ねて喜びを表現していた。

やれやれ、これで安全に進めるな。

海の藻屑にしてやるとか息巻いてたけど、そうなったのは海賊の方だつたな。

海賊たちを撃退した後、俺は目標の島に向かつてゆつたりと船を進めた。

急ごうと思えばいくらでも速度は出るが、慌てる旅でもない。

一日目の夜、俺はウニと一緒に甲板に出て空を眺める。

「月が綺麗だな」

「ウニユ～」

甲板で大の字になつて空いつぱいに広がる星の天井と月を見た。

月と星の光は、マナの反応によるものだと言われている。

より明るい星ほど、マナに満たされているんだそうだ。特に月はマナが多いため強く輝いており、地上のマナの源は月であるという論文も存在するんだとか。まあ、小難しいことは俺にはわからない。俺は寝転がりながら、隣のウニを撫でてやる。

「ウニユット」

とても気持ちよさそうな声を上げるウニの毛は柔らかくて、いいもふもふ具合である。

目的の島は、このまま進めば後二日ってところかな。

船内には食料もあるし、海水から飲料水を作り出す機能もある。

とりあえず、島に着くまで問題なさそうだし、星空も満喫出来た。

「さて、そろそろ寝るか」

「ウニー！」

船内に戻った俺とウニは、備え付けのベッドで眠ることにした。

翌朝、シャワーを浴びすつきりしてから朝食をとり、早速出発する。

操縦室で魔導モニターを確認しながら進んでいく。

魔導モニターは外の状況をレーダーやマナの流れから読み取り、透明の板に映す仕組みだ。しばらく進んだ頃、ウニがレーダーに可愛らしい手を向けて俺に訴えてきた。

「ウニイ！」

「うん？ ああ、確かに反応があるな」

画面を見ると反応が五つ、ここから北西側だ。

おそらく四つは船のようだが……もう一つは生体反応だな。しかもまあまあの大物だ。生体反応は忙しく動いており、どうやら暴れているらしい。

穏やかな雰囲気ではないな。  
さて、どうするか。

見て見ぬ振りをするという手もあるが——やつぱり放ってはおけないか。

「ウニ、ちょっと寄り道するけど良いか？」

「ウニユツ！」

ウニも理解してくれたようだ。

俺は生体反応に向けて進路を変えた。この船は自動操縦機能があるので、目標地点を設定して、まっすぐにそこへ進んでもらうこと出来る。速度を上げて船が進む。

ある程度近づいたところで、甲板に出た。画面で確認してもいいが、目視した方が状況はわかりやすい。

「あれは……くびながゆう首長竜か」

四隻の船に襲いかかっている首長竜が見えた。首長竜は海竜の一種だ。長い首を振り回して攻撃を仕掛けてきたり、きょうじん強靭な顎あごで船を噛み碎いたりしてくる、凶暴な魔物だ。様子を見るに、船にとつて状況はよくないな。

大砲を積んでいるが、海賊が使っていたのと同じ旧式のようだ。数は海賊船より多いが、相手が

首長竜と考えるとちよつと心許ない装備だ。

首長竜の皮膚は厚く、竜種だけあって魔力もそれなりに高い。

もつとも、魔力を器用に扱える種族ではないので、肉体を強化する程度の使い方しかしていないが……それでもあの程度の帆船なら軽々と破壊出来てしまうだろう。

俺の操るこの船のように魔導の力を利用した船でなければ、船の装甲にも限界があるからな。あの船も鉄板である程度補強されているようだが、ベースは木だ。

魔術師が同行しているのか、大砲の威力を魔法で高めるなどの対応はしているようだが、それでも首長竜にはほとんどダメージがない。

防御にも魔法を利用しているようだが、魔法陣を展開させての装甲の強化は非常に限定的だ。魔法陣の効果範囲はそこまで広くないし、無理して広げようとすれば効果が著しく落ちてしまう。

このままだと四隻とも沈没させられるのは目に見えているから、助け舟を出すとするか。

俺はパネルを操作して船のモードを変えてから速度を上げて、首長竜と船団の中に飛び込んでいく。

「な、何だ、何かが近づいてきてるぞ！」

「まさか、何だあの首は！ 新手か！」

船員の慌てる声が聞こえた。

だけど彼らに見えてるのは首ではない。対海龍用に、魔導作業船にクレーンやアームを設置し、

それを伸ばしたんだ。

ちなみに、クレーンの竿のよう伸縮する部位のことを、ブームと呼ぶ。

直後、首長竜が一隻に向けて首を大きく振った。

絶望したような声が、狙われた船から聞こえる。

「うわあああああ！ もう駄目だー！」

——ガキイイイイイイイイン！

「——ツ!?」

だがしかし、首長竜の振った太い首が当たつたのは船ではなかつた。

俺が操作したアームとバケット——重機の先端に付ける、鉱石や土砂などを入れて運搬するための歯つきの籠のようなもので防いだのだ。

当然これも、簡単には壊れない強力な代物だ。

「何だあれは！」

「鋼鉄の牙か!?」

船員たちが驚いている。鋼鉄の牙か。ちよつとおもしろく思えてしまつた。確かに見ようによつてはそう見える。

すると集音装置が船内の声を拾つた。

「い、一体どうなつてるのでですか？」

「わかりませんが姫、どうやら船は何かに守られているようですぞ」

うん？ 今、姫って言つたか？

うん、そう言われて改めて船を見れば、旧式とは言え、ちょっと豪奢な気もしてきた。

ま、いいか。とりあえず今は首長竜を何とかするのが先だな。

俺はクレーンのブームを伸ばし、先端に装着している解体工事用の鉄球を振り回して首長竜を攻撃する。

——ガンガン、ドゴンッ！

「ギヤアアアオオオオオオオオオオ！」

首長竜は悲鳴を上げて下がつていくと、少し距離をおいた辺りで唸りながらこちらを睨んでくる。

その位置なら鉄球が当たらず安全だと思つたのかもしれないが……甘い！

俺が船のパネルを操作すると、甲板に杭打機くいうちきが出現した。

本来は海底にアンカーを打ち込む建設設備だが、今回は下ではなく前方に向かつて設置する。

「魔導式射出杭バイブルパンカだああああ！」

放たれた杭が一直線に突き進み、見事に首長竜を貫いた。

この杭は建築術式で様々な効果が生み出せる。今撃つた杭には、当たった瞬間に電撃を放つ術式が付与されていた……本来の使い方なら、不要な機能なんだけれどね。

感電した首長竜は海面に倒れ、大きな水しぶきが上がつた。

よし、無事倒せたようだな。これでの船も助かつたことだろう。

すぐにでも離れようと思ったのだけど、拡声器のような魔法を使える者がいたらしく、呼び止められてしまつた。

ここで逃げるよう而去るのも変な話なので、とりあえず会つておこうと思つて接舷せつけんし、ウニと一緒に乗り移る。

随分と船員の多い船のようだが、彼らを代表してやつてきたのは、俺より少し下さ……二十歳にならないくらいの女性と、豪傑ひょうけつと呼ぶにふさわしい雰囲気の騎士きしだつた。

二人は頭を下げて、口々に礼を言う。

「本当にありがとうございます。助かりました」

「あつはつは、いやはや助かりましたぞ」

「いえ、お気になさらず。たまたま通りかかつただけなので」

「ウニユ！」

出来るだけ相手に気を遣わせないよう応対する。

「いやいや、貴殿のお力がなければ今頃我々は全滅でしたぞ！ 命の恩人なのです、敬語も使つていただかなくてけつこうです……それにしても、実に凄すさまじい船でござりますなあ！ あれだけの大物をあそこまであつさりとは。しかも何ですか？ 妙な腕まで生えておるとは」 騎士姿の男は俺の乗っていた船を不思議そうに眺めていた。

それは腕ではないんだがな。それにそこまでのことなのだろうか？

王国では普通に海上での建設作業に役立てていた作業船だから、驚かれると妙な気分になる。

「それでも、可愛らしいおともがご一緒なのですね」

姫と呼ばれていたらしく女性が、ウニを見てニッコリと微笑む。

「ああ、こつちはブラウニーのウニだ」

「何と！ ブラウニーといえば希少な妖精ではありませんか！ 初めて見ましたぞ！」

騎士が驚き目を丸くさせていた。そういうえば師匠も、ブラウニーに好かれるのは珍しいと言つていたつけ。

ウニは俺が魔導建築を学び始めてしばらく経った頃、森で魔獣に襲われていたところを助けたのがきっかけで仲良くなつた。そして自ら進んで、使い魔契約を結んしてくれたんだ。

「ふふ、可愛い。でも、貴方様の船もすごいですよね。帆がないのに動くのですね」

「魔導船だからな。まあ魔法の力で動いていると思つてくれればいい」

「ほうほう、魔法の力ですか」

俺の女性への返答に、騎士が感心したように頷く。

「ああ、それで、実はちょっと急いでいてな」

「それは、お引き止めしてしまい申し訳ありません。では、何かお札を」

「いや、特別何か欲しいってことはないんだが……あ、首長竜の肉だけ分けてもらつてもいいか？」

「分けるだなんてとんでもない！」

目を見開いて女性が叫んだ。

え？ 駄目なのか？ ううん、一応俺が倒したんだが、やっぱり自分たちが先に戦っていたんだから、自分たちに所有権があると言いたいんだろうか？

そう思つていたら、予想外の回答が返ってきた。

「全部差し上げます！」

「え？ 全部？」

「はつはつは！ 当然でしょう。あれを倒したのは貴殿なのだから、所有権は貴殿にあります」

驚く俺に、騎士が笑いながら補足してくれる。

どうやら独り占めするつもりがないどころか、全て俺のものという認識のようだ。

「それはありがたいが、俺としては必要な分だけの肉が貰もらえたら十分だ」

「ふむ、確かにこれだけの大きさであれば一隻の船には乗らないでしようからな」

騎士が一人納得したように頷くが、別にそういうわけじゃない。

腕輪の形状変化機構で出てくる物は全て、次元倉庫に格納されており、また形状変化させる前の状態の腕輪でも、この次元倉庫から物を出し入れ出来る。

次元倉庫というのは、文字通り別次元に繋がっている倉庫だ。その容量は膨大で、首長竜程度なら、百匹でも千匹でも、一万匹でも入る。

## 立ち読みサンプル はここまで